

宮城県美術館、県民ギャラリーについての要望書

「宮城県美術館 40 歳のハッピーバースディ展」には美術関係教職員から、県民ギャラリーのこれからについて意見が寄せられた。それらのメッセージを別紙のとおり提出する。

この度、宮城県美術館の現地存続が叶った事を安堵を持って受け止めた。一方で、結果として増築なしの改修案では県民ギャラリーのスペースが半減してしまう危惧がある。

そもそも現美術館は、半世紀前、団体展のできるギャラリーを求めて市民が運動し、実現したのであるが、当初描かれた設計図には、ミュージアムとしての美術館にはギャラリーは必須ではないとの考えから、市民の求めるギャラリーは無かった。再要望の結果、収蔵庫の一部を用途変更し、県民ギャラリーⅠ・Ⅱが作られたのであった。

しかし、今回のリニューアル案では、ギャラリーは現状から半減するとの案になっている。となると、児童生徒展をはじめとする県内の大規模展はどうなるのだろうか。その開催が危ぶまれる。

寄せられた下記のメッセージにあるように、関係者は困惑している。宮城県の主催・共催事業として、長年に渡り継続実施されている幼・小・中・高・大学生の造形・美術展の今後について、教育委員会・宮城県美術館は責任をもって考えていただきたい。美術館付属のギャラリーに現状のスペースは不可欠であり、設計上の工夫も含め検討いただきたい。

一方、東部に計画されている新県民会館の大ホールに大ギャラリーの付設を、との声も耳にする。そうなればこの児童・生徒展をはじめ河北美術展、宮城県芸術祭、日展等の巡回展や、さまざまな見本市の開催が可能であり、70 年来の大ギャラリーの夢が実現されることとなる。

現在、県民ギャラリー利用者が最も危惧するのは、実施していた大切な事業がどこからもしきだされる事である。宮城県美術館（生涯学習課）、宮城県民会館（消費生活課）等を管轄する県には、せんだいメディアテークを運営し新ホールを考える仙台市と連携して、よりよい方策を講じていただきたい。何より、評価の高いイベントが持続されることを希求する。

2021年11月8日

宮城県美ネット 共同代表 早坂貞彦